

【暫定版】『聞き書きマップ』による聞き書き作業・プレゼン作成の手引き

2014/08/20 現在

1. 『聞き書きマップ』のコントロール画面の説明

『聞き書きマップ』のコントロール画面は、この図のようになっています。

撮影時刻で音声を頭出しして、 「聞き書き」メモを作成

- 写真と音声で連動するので効率的。
 - ▶ 「前の写真へ」「次の写真へ」ボタンをクリック
→ その1つ前／1つ後の写真が表示され、
→ 撮影時刻から音声再生される。
 - ▶ その内容を「メモ欄」に記入。
 - ▶ 「もう一度聞く」「3秒戻す／進める」ボタン
で、聞き直しも簡単。
- できたデータを「ファイルへ書き出す」
 - ▶ KMZ形式でエクスポート。
→ 写真・GPSデータ・聞き書きしたテキストを
まとめて他の地図ソフトに渡せる。



このコントロール画面上で、現地で録音した音声の「聞き書き」をする手順は、以下のとおりです。

- (1) コントロール画面の「前の写真へ」「次の写真へ」ボタンなどを使って写真を選ぶ。
- (2) すると、自動的に、その写真の撮影時刻から録音再生される。
- (3) それを聞きながら、「メモ欄」にその内容を記入（キーボードから入力）する。

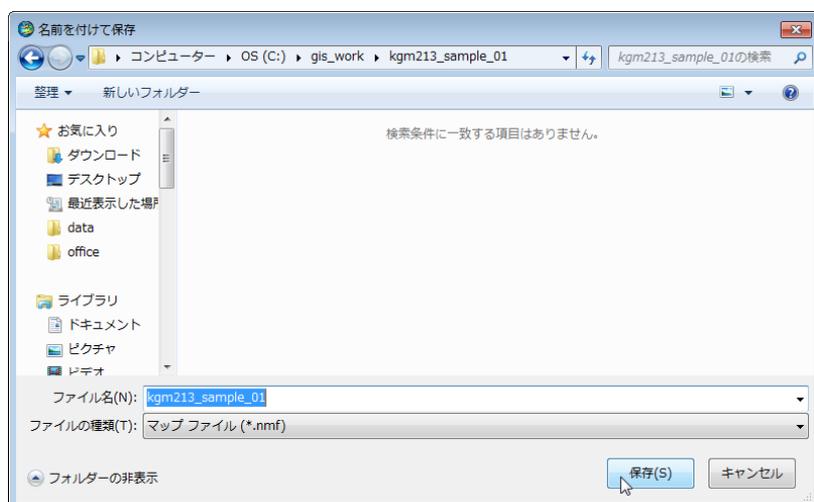
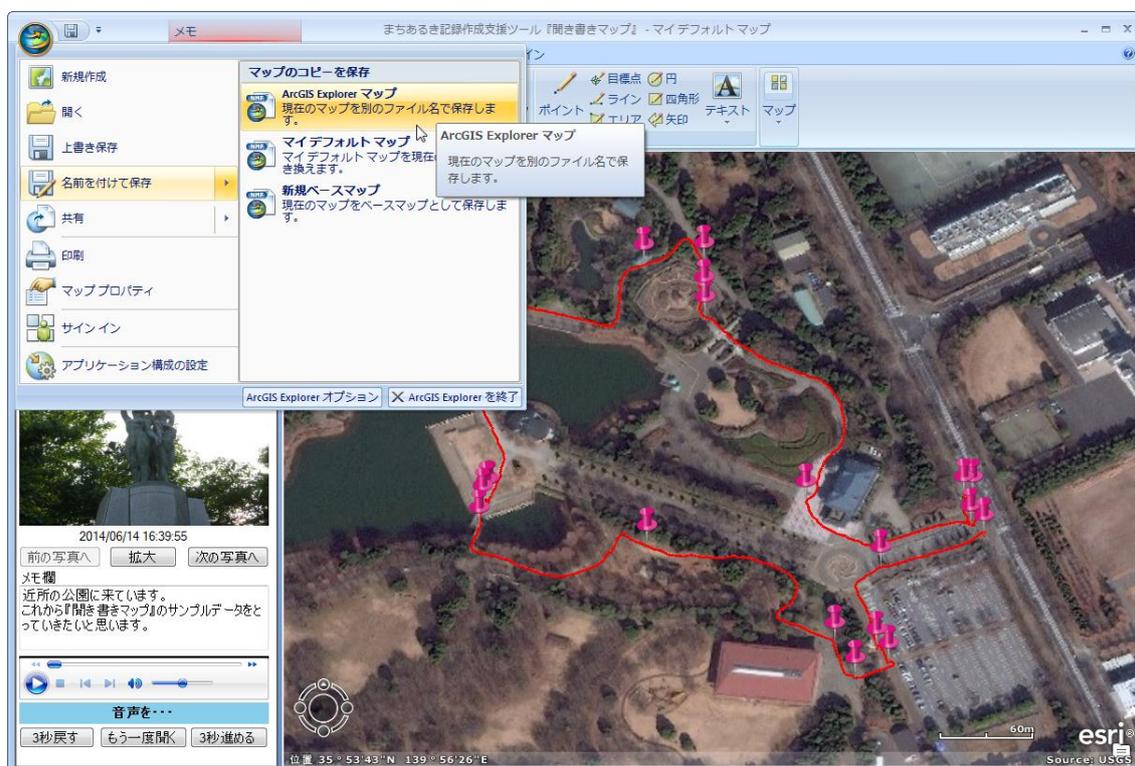
【ヒント】

録音の一言一句を忠実に書き起こさなくても、要点だけ「メモ」すれば十分です！
また、メモ欄の下に、音声を「3秒戻す」「もう一度聞く」「3秒進める」などのボタンが用意してあるので、これらを使って、何度でも聞き直しながら、マイペースで「聞き書き」作業を進めましょう！

こうして記入したメモは、「次の写真へ」などのボタンをクリックすれば、自動的に保存されます。ですから、せっかく書いたメモをうっかり「保存し忘れた！」などという心配はご無用です！

2. 『聞き書きマップ』で作った地図の保存

『聞き書きマップ』で作った地図は、左上の（地球型の）アイコンをクリックして出るメニューから、「名前を付けて保存」→「ArcGIS Explorer マップ」を選び、適当な名前を付けて保存します。この例では「kgm213_sample_01.nmf」という名前です。



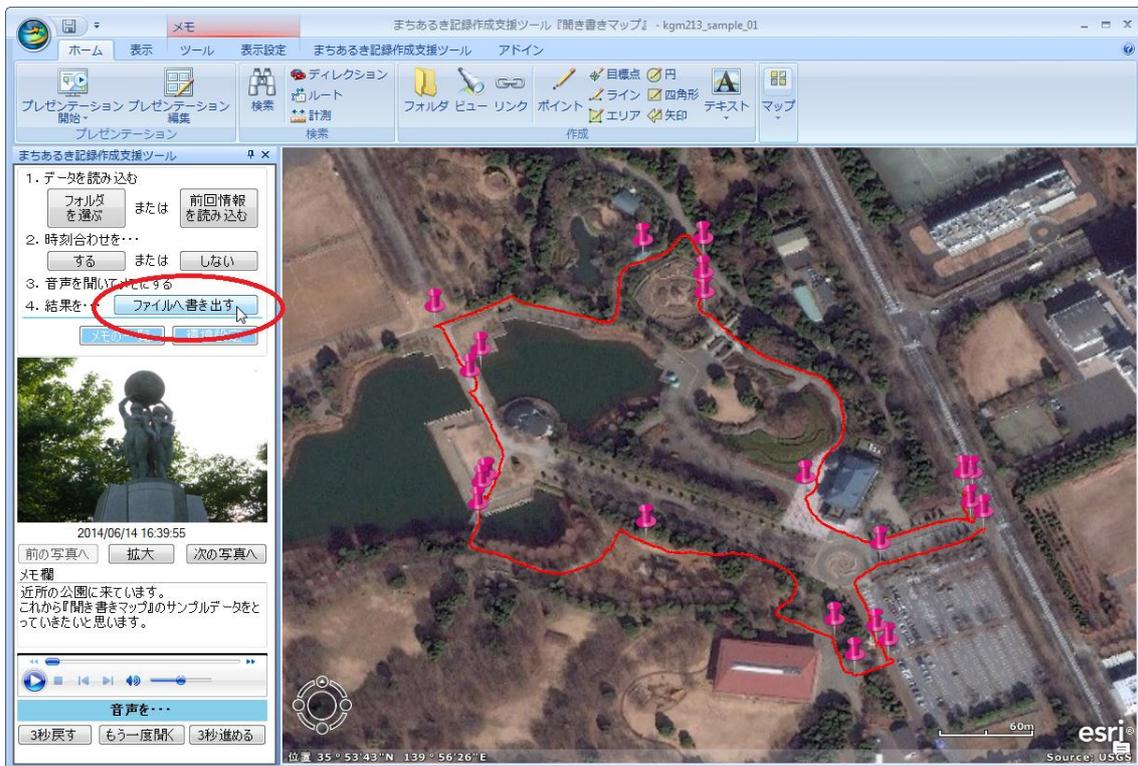
3. まちあるき結果のデータを、KMZ 形式のファイルに書き出す

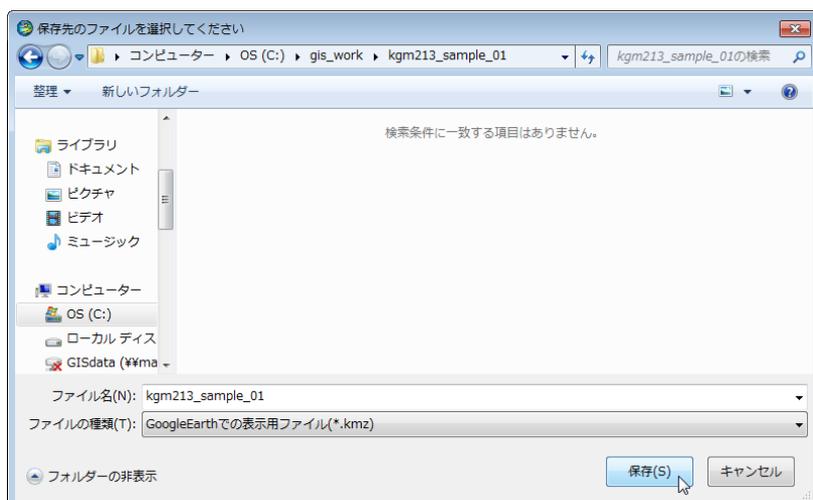
『聞き書きマップ』で記録した、GPS 経路・写真・「聞き書き」したメモのデータを、まとめて「KMZ 形式」のファイルに書き出すことができます。この形式で保存したデータは、「グーグルアース」で表示したり、本格的な「地理情報システム」に読み込んで分析したりできます。これには、つぎの[A]および[B]の、2通りの方法があります。

[A] グーグルアースでの表示用に保存する

下図のように、「ファイルへ書き出す」ボタンをクリックし、適当な名前を付けて保存してください。

この際、「ファイルの種類」が「GoogleEarth での表示用ファイル」となっていることにご注意ください。この種類を選ぶことで、グーグルアースで表示できるファイルとして保存されます。

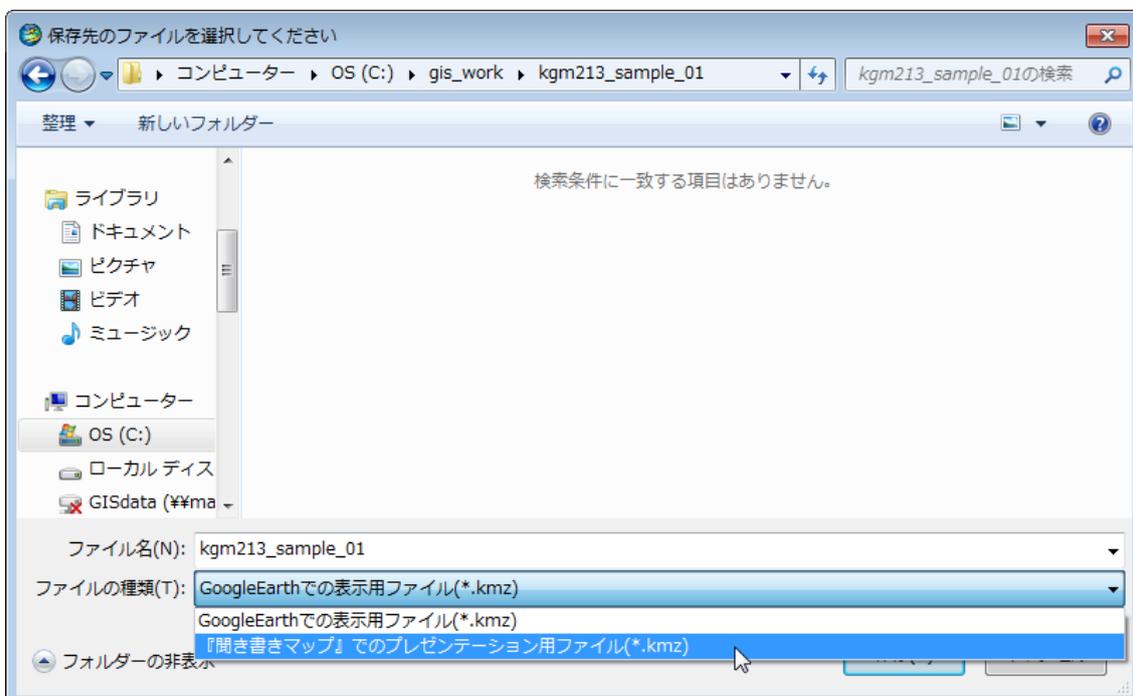


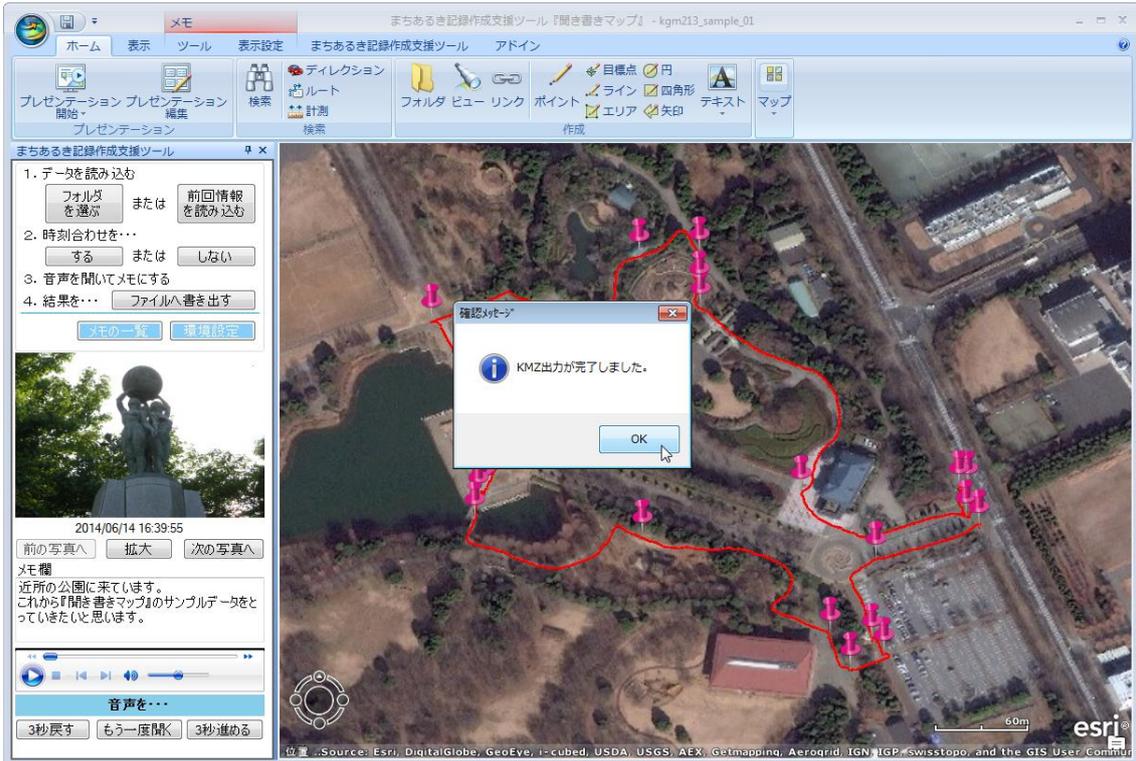
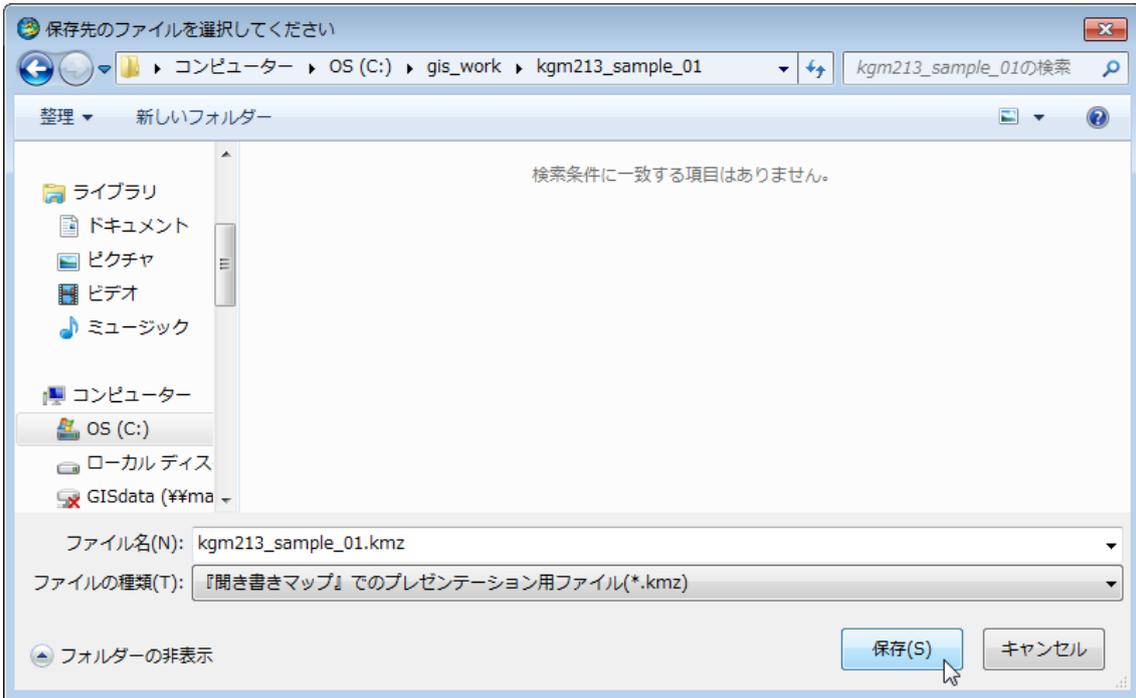


[B] 『聞き書きマップ』でのプレゼンテーション作成用に保存する

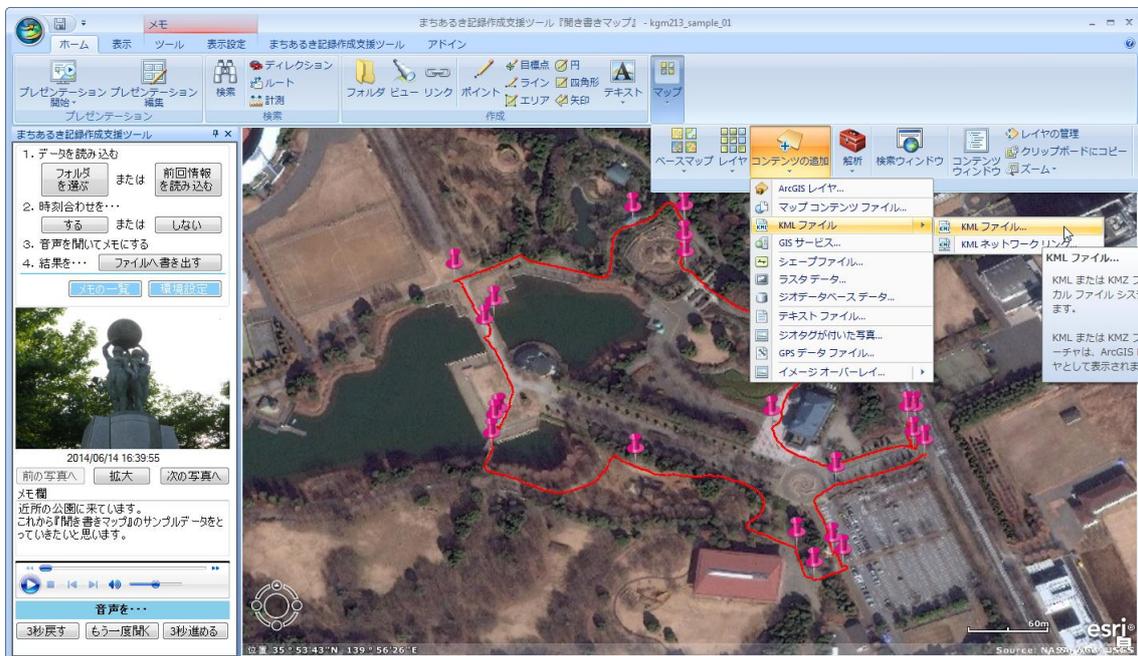
「ファイルに書き出す」ボタンをクリックして保存したデータを、もう一度『聞き書きマップ』に読み込めば、とても魅力的なプレゼンテーションを作ることができます。以下に、その手順を示します。

- (1) 「ファイルに書き出す」ボタンをクリックして、「保存先のファイルを選択してください」の窓が出たとき、「ファイルの種類」のメニューから、『聞き書きマップ』でのプレゼンテーション用ファイル」を選びます。

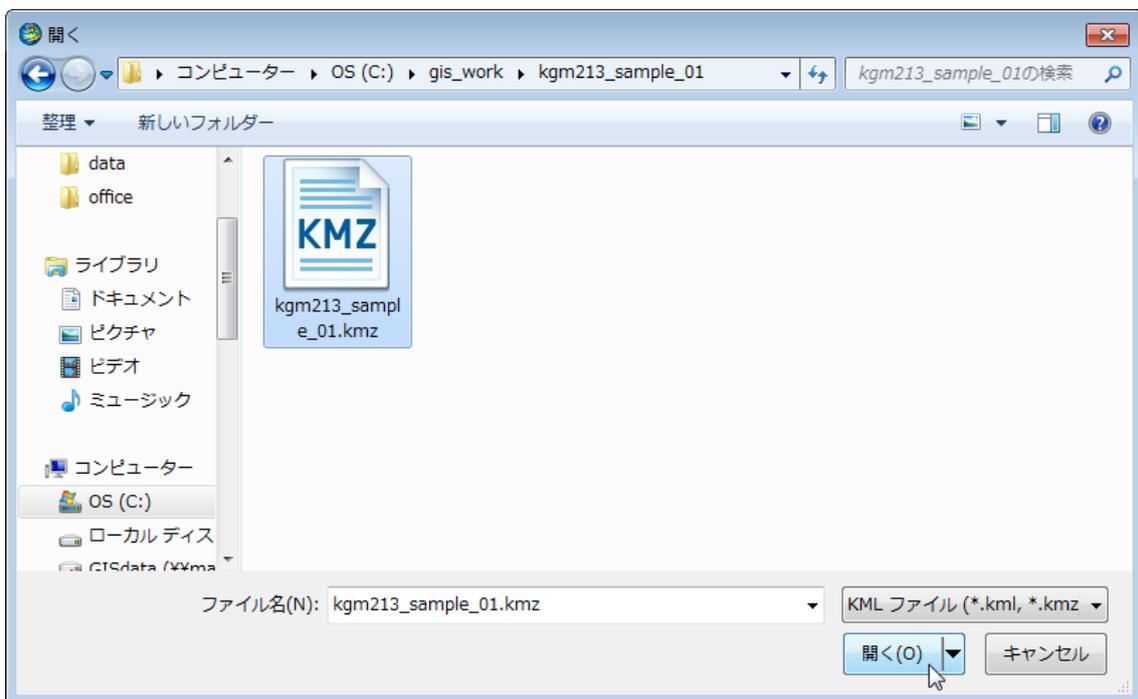




(2) 『聞き書きマップ』から、下図のように、KML ファイルを読み込むメニュー項目を選びます。

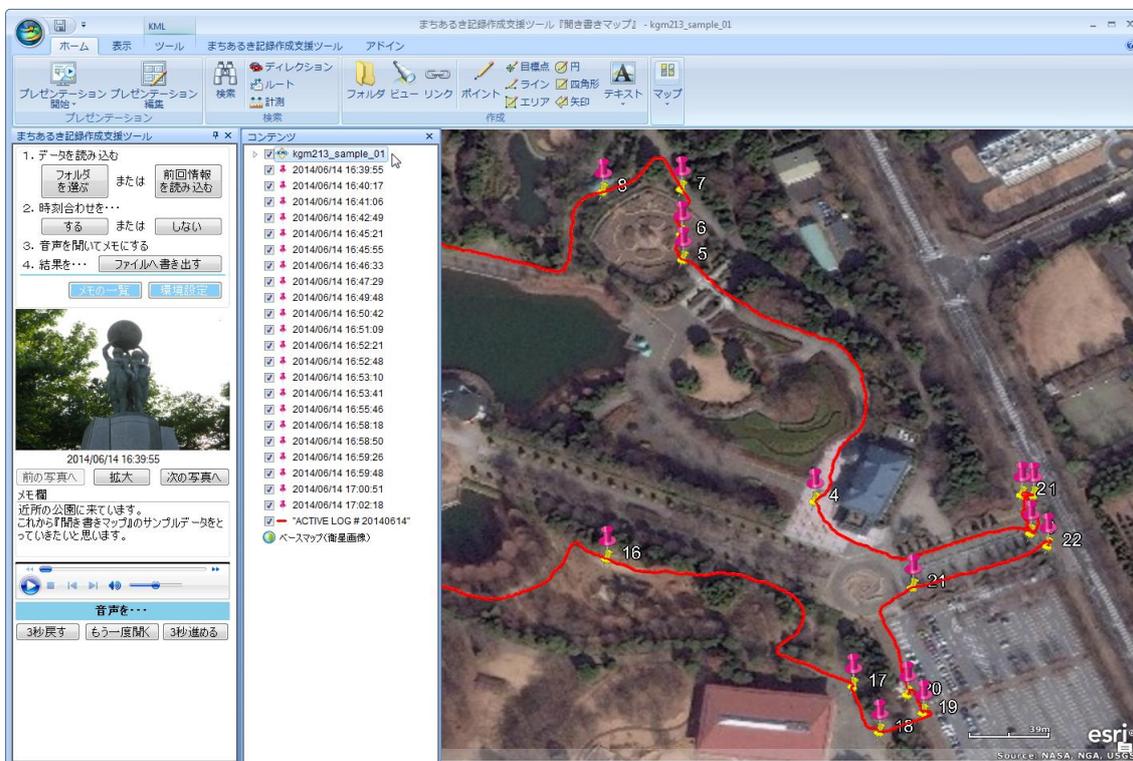


(3) 先ほど保存した KMZ ファイルを選びます。

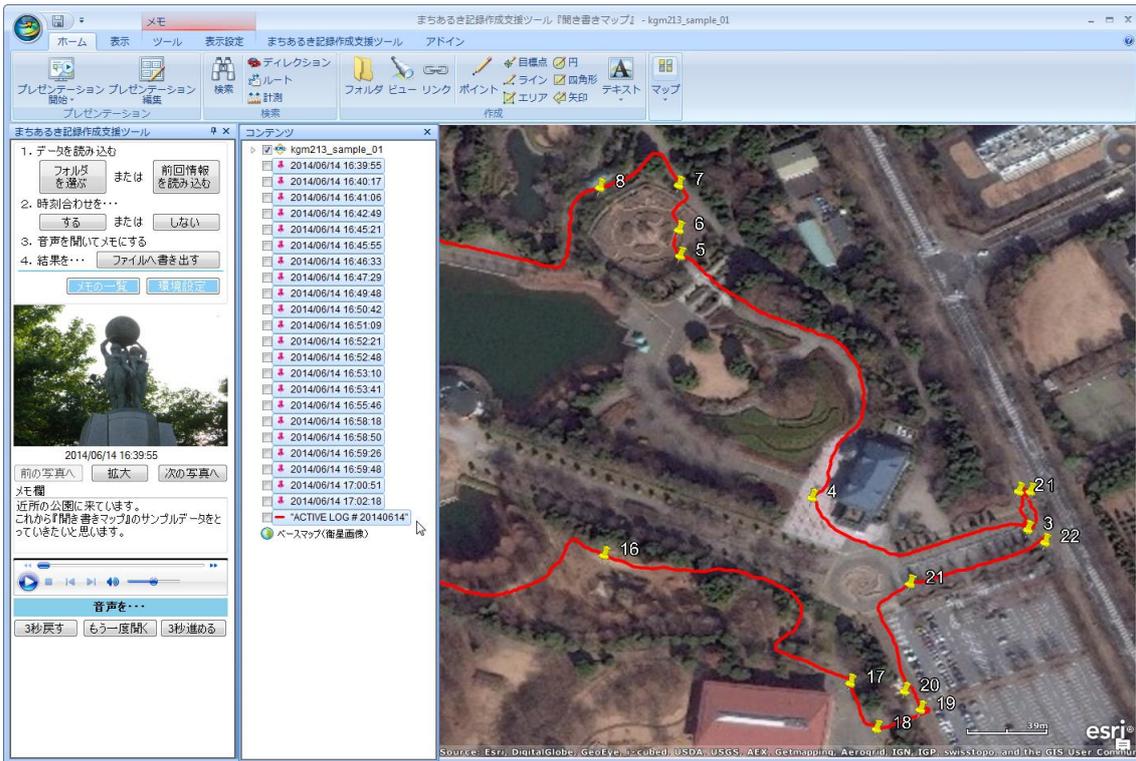


(4) すると、このように、「コンテンツ」画面が現れ、そのなかに、読み込まれた KMZ 形式のデータも表示されています。

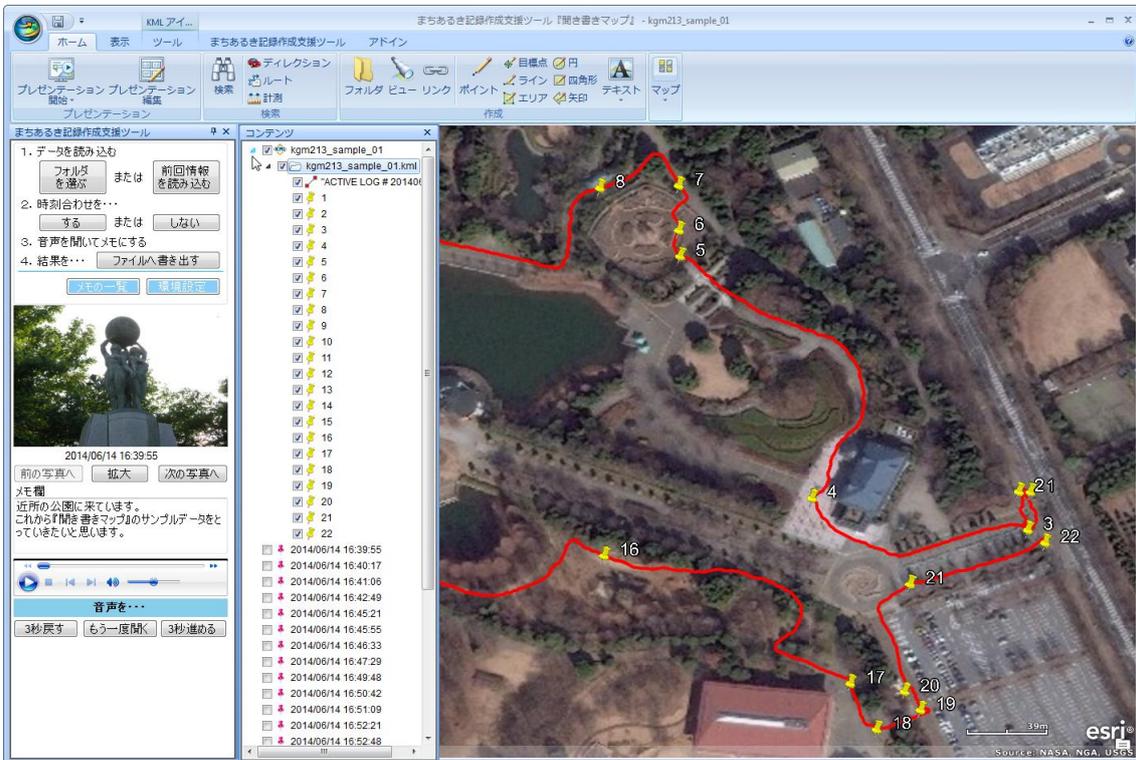
また、地図画面でも、もとのデータ（ピンク色のピン）に重なるように、新しく読み込まれた KMZ データ（一連番号付きの黄色のピン）も表示されています。



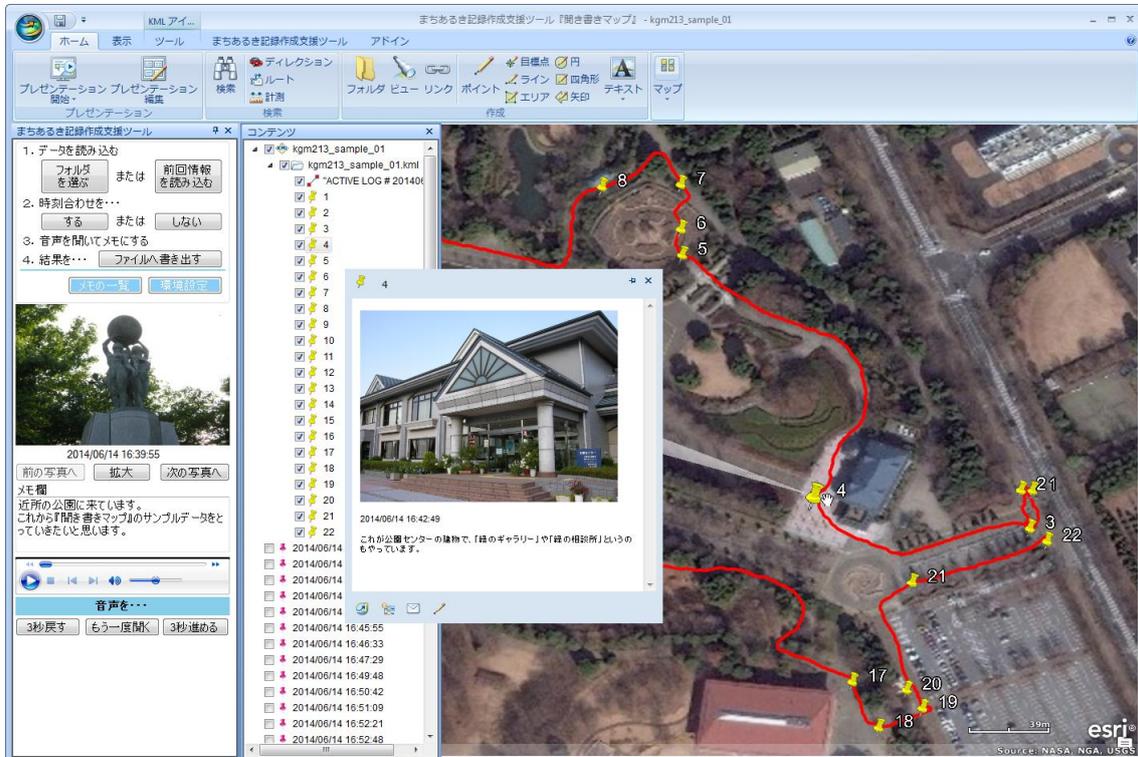
(5) ここで、「コンテンツ」画面の中の、もとのデータ項目（ピンク色のピン）の左側のチェックマークをすべて外すと、下図のように、KMZ データだけの表示になります。



(6) また、ここで、KMZデータの項目（この例では「kgm213_sample_01.kml」）の左側の▲印をクリックして展開すると、下図のように、一連番号付きの黄色のピンの項目が表示されます。



(7) ここで、地図上の黄色のピンのどれか一つをクリックすると、下図のように、その地点で撮影された写真と、「聞き書き」したメモとが、ポップアップで表示されます。



(8) このような KMZ 形式のデータと、ポップアップ画面とを使って、『聞き書きマップ』で記録した「まちなるき」の結果を取りまとめた、「動く地図」によるプレゼンテーションを作ることができます。

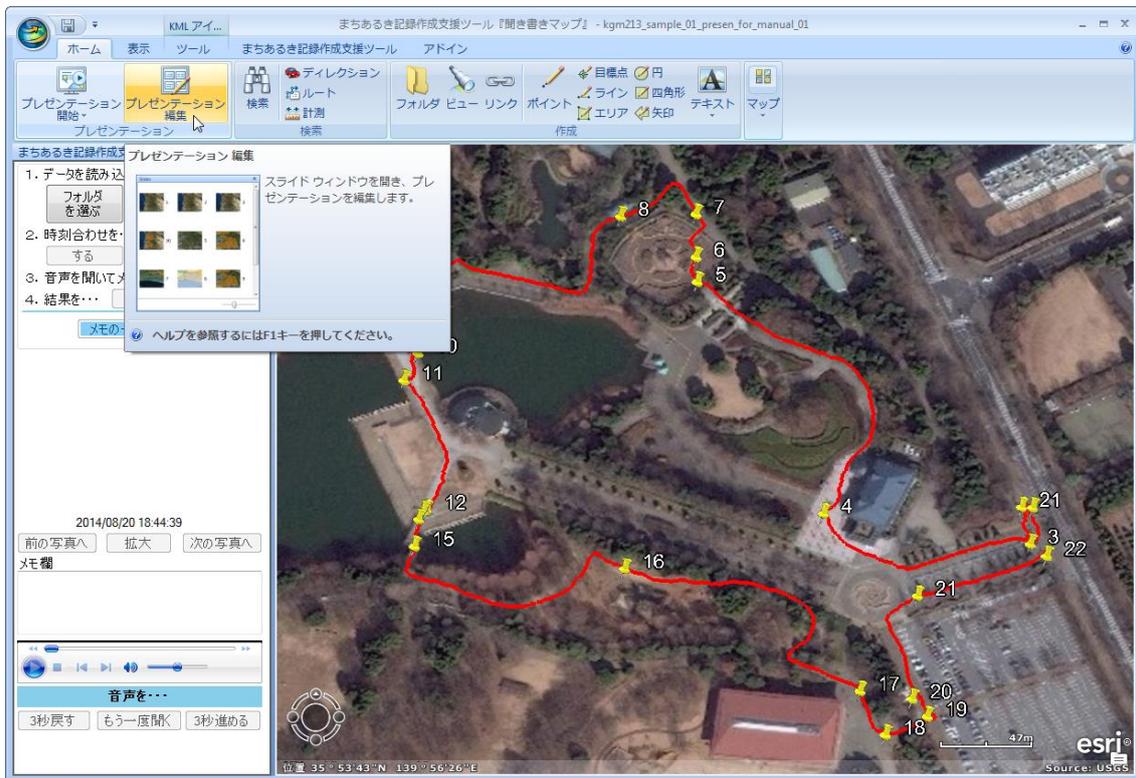
この手順について、つぎに説明します。

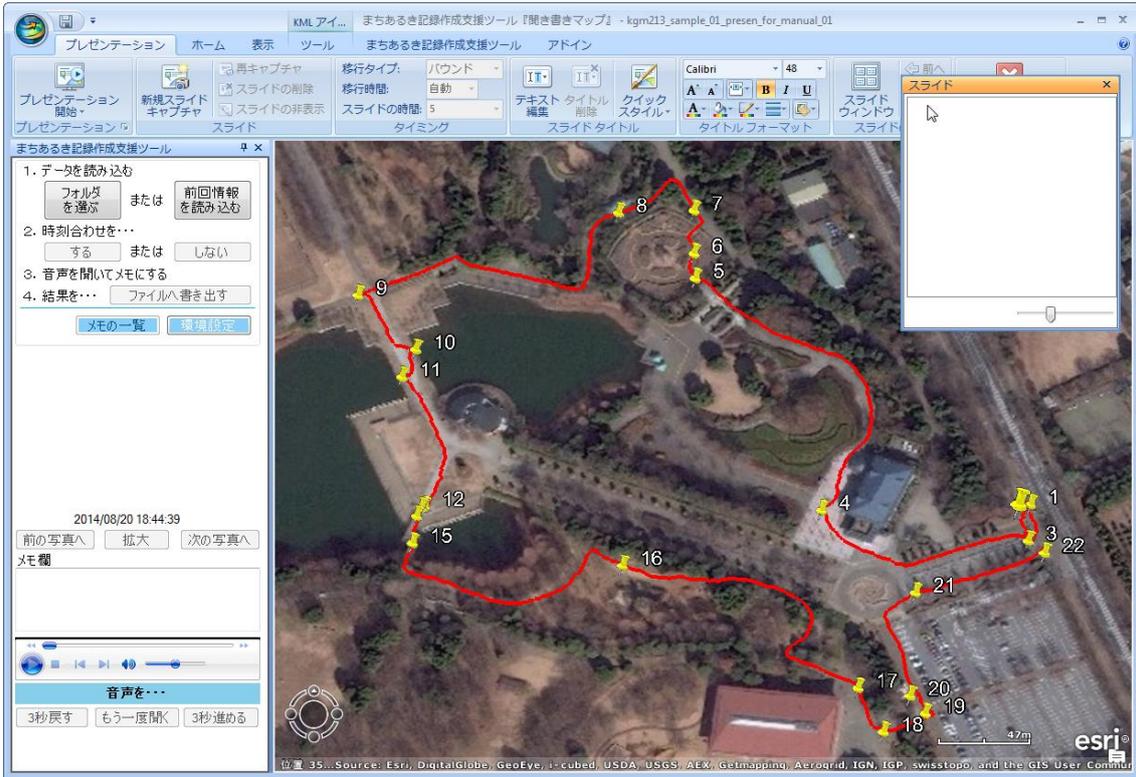
4. プレゼンテーションを作成する

『聞き書きマップ』のエンジンである地図ソフト”ArcGIS Explorer”には、たいへん強力なプレゼンテーション機能が備わっています。

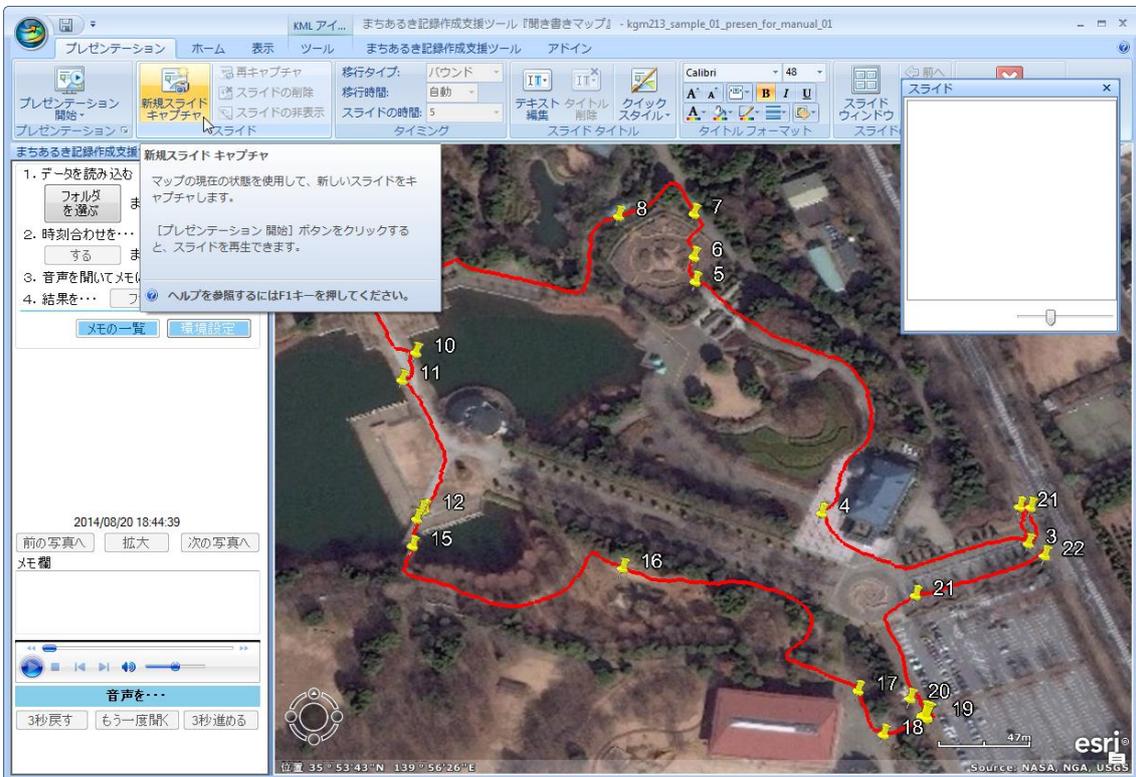
この機能を使って、『聞き書きマップ』によるまちあるき結果のデータを、動く地図によるプレゼンテーションの形に取りまとめるには、次の手順に従って作業します。

(1) 「ホーム」のメニューから、「プレゼンテーションの編集」を選び、「スライド」の窓を出します。

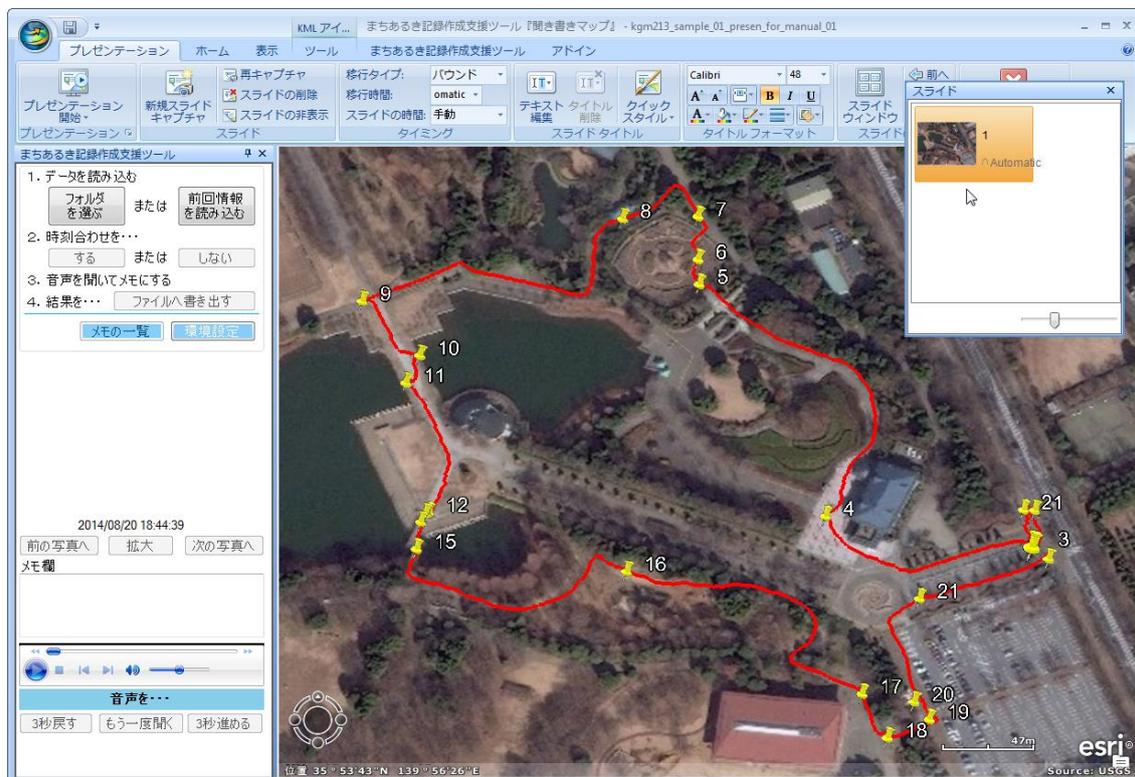




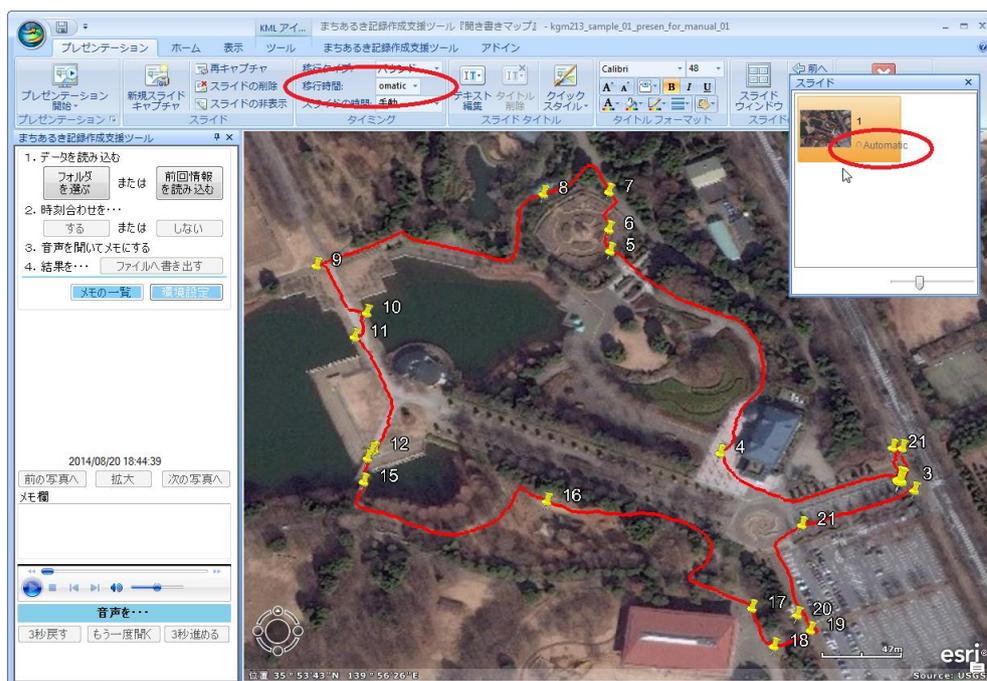
(2) 「新規スライドキャプチャ」をクリックします。



(3) 「スライド」の窓に、最初のスライドが登録されたのを確認します。

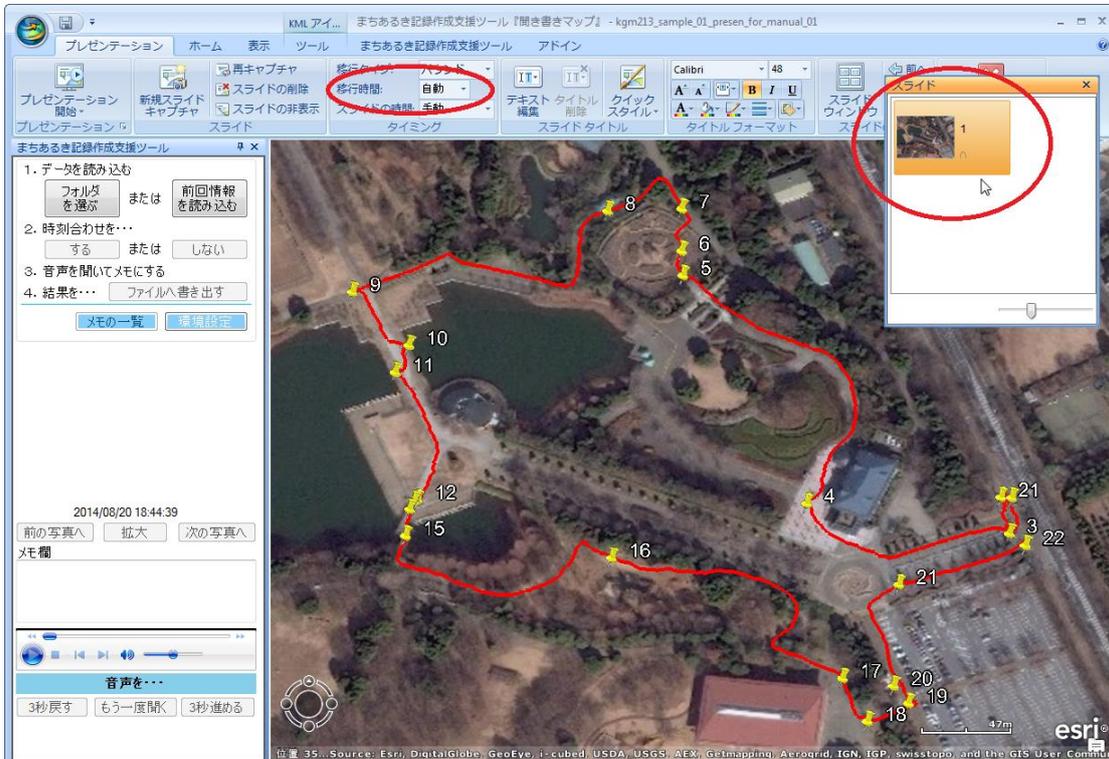
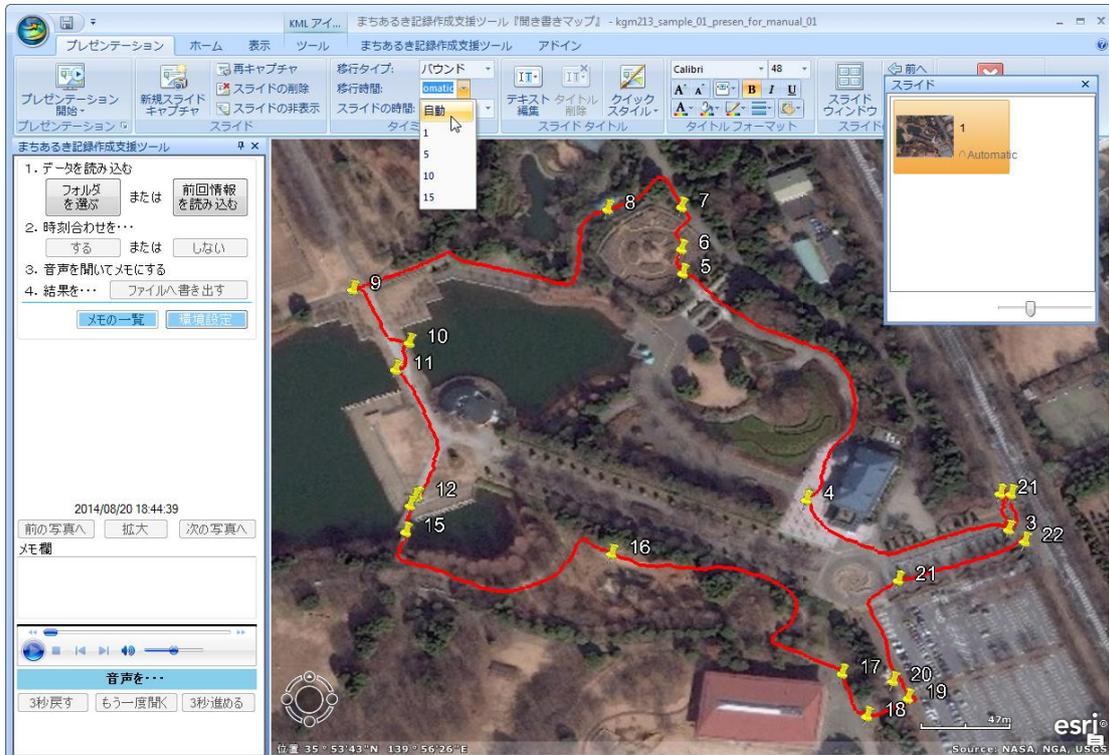


(4) 【要注意：現バージョンの ArcGIS Explorer のバグかも？】「移行時間」が、なぜか「Automatic」(←英語表記)で、「スライド」窓のなかのスライドにも「Automatic」の表示があります。この状態だと、プレゼンテーションがうまく動作しません。

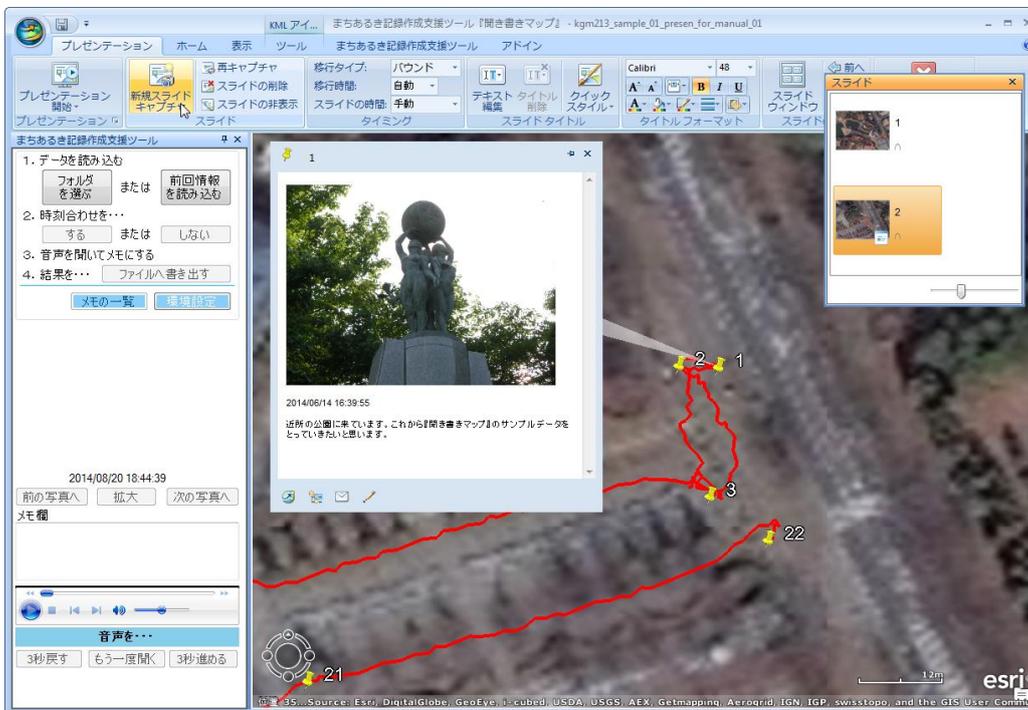


(5) 上記のバグ(?)を回避するため、この時点で、「移行時間」のメニューから、「自動」(←日本語表記)を選んでおきます。

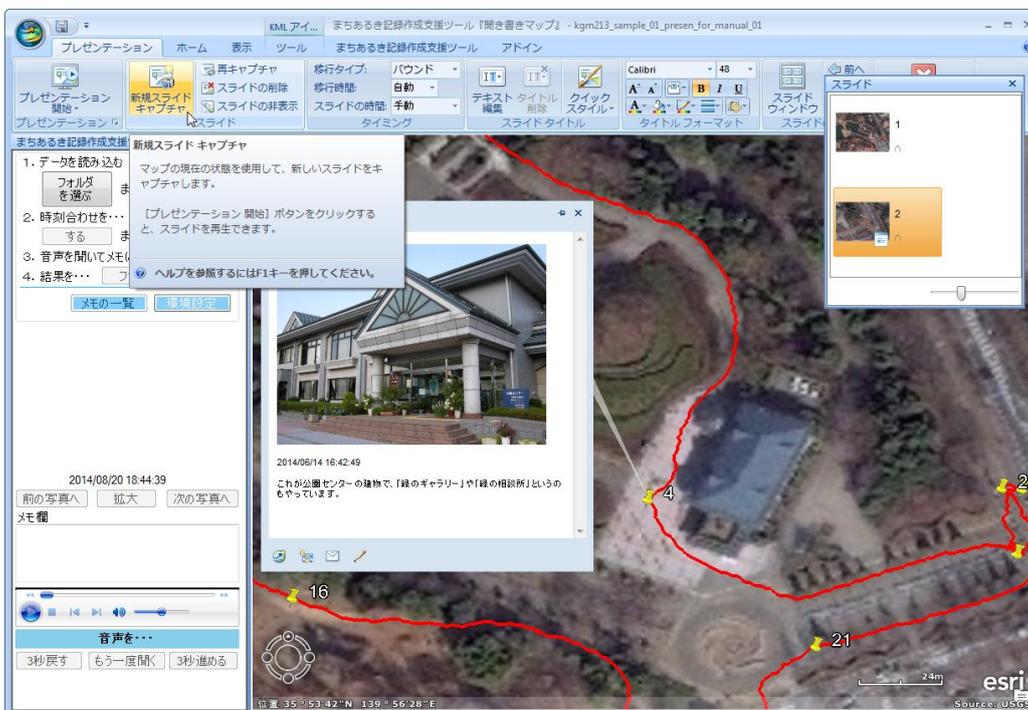
これにより、「スライド」窓の表示からも「Automatic」が消えます。



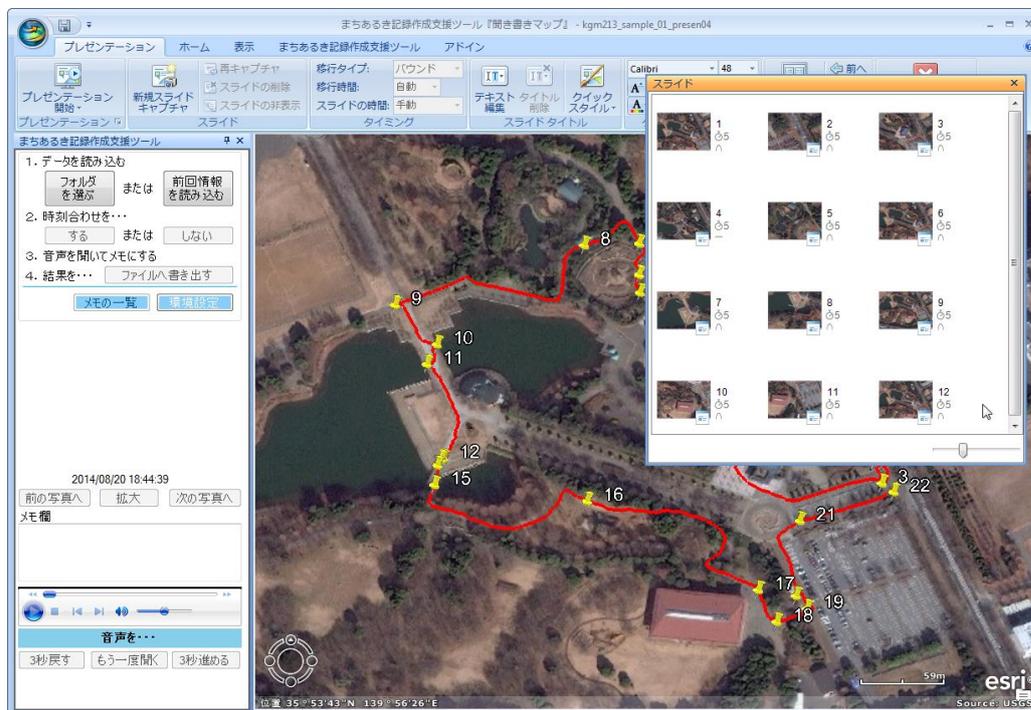
(6) 地図を自由に移動したり、ズームしたり、適宜ポップアップ画面を出したりして、次のスライドのための地図画面を作り、また「新規スライドキャプチャ」をクリックします。これが、2枚目のスライドとして「スライド」窓に登録されます。



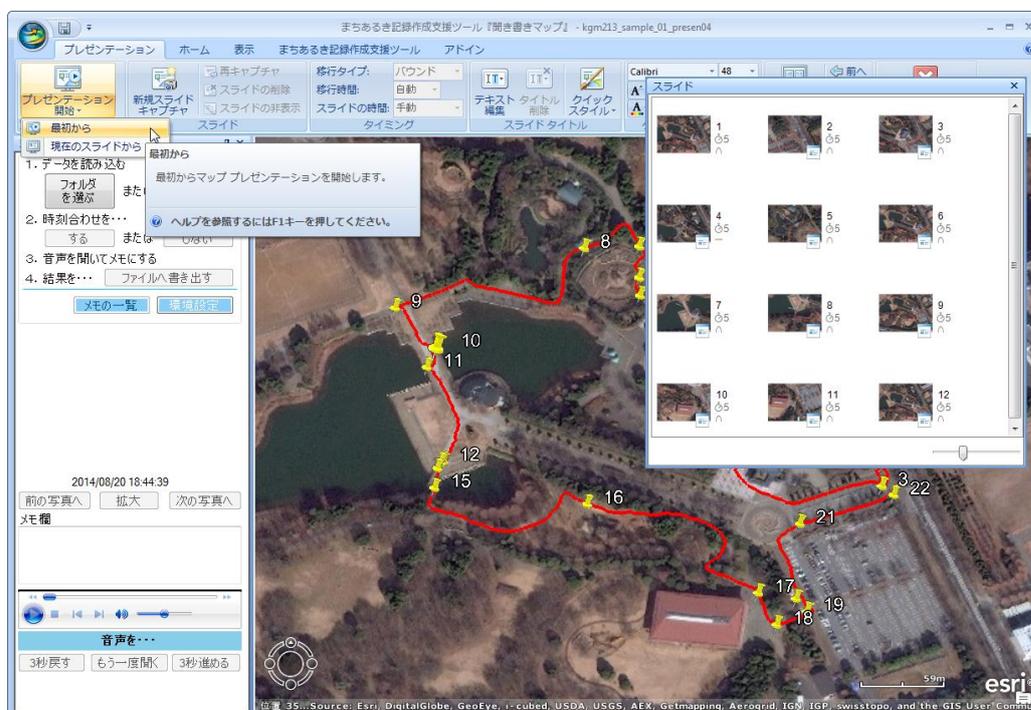
(7) 同様に、3枚目のスライドを登録します。



(8) 以下、同様にスライドを登録していけば、プレゼンテーション用のスライド集を作ることができます。



(9) スライド集ができたところで、「プレゼンテーション開始」ボタンをクリックすれば、プレゼンテーションが始まります。



(10) プレゼンテーション画面は、↓このようになります。画面が切り替わるたびに、地図がダイナミックに移動したり、ズームしたりするので、たいへん印象的です！



【参考】

ArcGIS Explorer（ビルド 2505）のプレゼンテーション機能などについて、さらに詳しいことは、↓こちらの資料をご覧ください。

<http://www.esri.com/cgi-bin/wp/wp-content/uploads/documents/arcgis-explorer-desktop-2505-guide.pdf>